

〈自由論文〉

東南アジアにおける和僑の現状

—タイとミャンマーを中心に—

Overseas Japanese in Southeast Asia

鈴木 岩 行

Iwayuki Suzuki

【Abstract】

Overseas Japanese are called Wakyo in recent years. This paper is written about consciousness and feature of Overseas Japanese in Southeast Asia, especially Thailand and Myanmar.

【キーワード】

和僑, 意識と特徴, タイとミャンマー

1. はじめに

海外, 特にアジアで働く日本人が急増し, 注目を集めている。筆者は日本企業の海外での経営について調査研究してきたが, 現地調査する中で, 日本から派遣される社員だけでなく, 現地採用される日本人や駐在員とその家族以外の日本人の存在が増えていると感じて来た。『朝日新聞』¹⁾の記事によると, 外務省の統計では, 海外に住む日本人は2013年で125万8000人。うちアジアは36万人で, 過去10年間で世界全体で増えた34万7000人のうち, 15万6000人分を占める。なかでも東南・南アジアはほぼ倍増し, 17万4000人となっている。日本からの駐在員と家族, という従来からのイメージとは違う「現地採用」と「起業」で働く人が目立つ。『海外進出企業総覧』によると, 2003年から10年間に海外で設立された日系企業9900社のうち7200社がアジアに集中。アジアの中でみると, 12年以降は中国より東南・南アジアへの進出数が多い。日系企業が現地採用

で日本人を求めている。アジアの潜在力に期待して起業する日本人も増えている。

海外で働いている日本人は, かつては企業派遣の駐在員が多く, 任期(3年から5年)が終わると帰国する人が多かった。しかし, 現在は自らの意思で海外へ行き, 上記の記事のように現地で(日本企業や現地企業あるいは第三国企業に)採用される人が増えている。さらには, 会社からの帰国の辞令に従わずに退職し, そのまま現地に残る人も出てきている。このような自らの意思により外国で生活している人を「和僑」と呼ぶようになってきている。和僑は, 海外に住む中国人を指す華僑をもじったものである。かつては主に外国で起業した人を和僑と呼んでいたが, 現在は広くとらえるようになってきている。和僑の組織として, 和僑会が世界各地で創設されているが, 和僑会による和僑の定義²⁾は, 次のとおりである。

「和僑」とは祖国日本を離れ, 中長期的に異国の地に住み, そこで生計を立てている日本人のことを呼ぶ。日系企業の駐在員である, 現地採用で仕事をしている, 現地企業又は外

国企業で働いている、独立して仕事をしているなどといったことは問わない。

筆者も和僑会の定義に従い、和僑を「日本を離れ、中長期的に異国の地に住み、そこで生計を立てている日本人」のこととする。

海外在住の日本人について書かれた本はいくつかあるが、内容は大きく3つに分かれる。まず、海外での日本人起業家を取り上げたものである。渡辺賢一『和僑 15人の成功者が語る実践アジア起業術』(2007年)³⁾、佐脇英志「3スタートアップイノベーション：ASEAN日本人起業家が織りなす新イノベーション」(2018年)⁴⁾、同「アセアン日本人起業家の研究：ミャンマーの事例」(2019年a)⁵⁾、同「日本人起業家の巨大インキューベーションセンター@セブ・フィリピン」(2019年b)⁶⁾、堀内弘司「華僑ならぬ和僑に関するユニークな研究 研究テーマ：キャリア充実を求め、中国に越境し起業する和僑たち」(2011年)⁷⁾、同「中国に越境する和僑起業家のエスノグラフィー—日本人のトランスナショナル化に関する事例研究—」(2012年)⁸⁾などである。渡辺賢一は、日本人起業家を香港で7人、深圳で3人、上海で3人、モンゴルで2人を紹介している。佐脇英志は2018年でASEANの日本人起業家を8人取り上げ、3種類に分類している。また、2019年aでミャンマーの日本人起業家を12人取り上げ、イノベーションの視座から分類している。さらに、2019年bでセブの日本人起業家を7人取り上げ、インキューベーションセンターとしてのセブを紹介している。堀内弘司は中国の和僑60人に対して動機や社会背景をインタビュー調査している。いずれも起業家(和僑会の定義では「独立して仕事をしている」人のこと)を対象にしたもので、「日系企業の駐在員」や「現地採用で仕事をしている」人は含まれない。次は、「独立して仕事をしている」人だけでなく、「日系企業の駐在員」や「現地採用で仕事をしている」人に対してもインタビューしたものである。野村進『アジア定住 11ヵ国18人の日本人』(1996年)⁹⁾や須藤みか『上海ジャパニーズ—日本を飛び出した和僑24人』(2007年)¹⁰⁾などである。野村進は、

インドネシア2人、タイ2人、シンガポール2人、マレーシア2人、カンボジア・ベトナム・フィリピン・ブルネイ各1人の計12人の東南アジア和僑を載せているが、20年以上前に書かれたものなので、現在とはだいぶ状況が異なると思われる。須藤みかは題名どおり、上海で働いている(いた)日本人を対象にしたものである。ともにインタビューだけである。三番目は、現地での日本人の意識と生活実態を描いたものである。赤木攻『タイの永住日本人』(1992年)¹¹⁾や趙夢雲「上海の『和僑』の生活諸相：アンケート調査からその意識と特徴を析出する」(2011年)¹²⁾などである。赤木攻は在タイ和僑95人を調査し、彼らの日本やタイを見る目や自己評価について書かれている。しかし、タイトルどおり永住日本人を対象としたもので、日本企業からの派遣者は対象とされていない(赤木は永住日本人を①戦前グループ、②応召グループ、③一旗グループ(現在でいう起業)、④婚姻グループ、⑤脱駐在員グループ(起業したり、現地採用となるものあり)、⑥二世グループに分類している)。また、調査が行われたのは1980年代末で、現在とは状況がかなり異なると考えられる。趙夢雲は上海の日本人(和僑)の意識と特徴について書いている。こうしてみると、現在増加している東南アジア和僑(起業家、駐在員、現地企業勤務者)に対して、意識まで踏み込んだ調査は見当たらない。そこで、筆者は東南アジア和僑の現状を明らかにするために、東南アジア和僑に対して、(1)当地で働いている理由、(2)当地で仕事をするうえで日本より有利なこと、(3)当地で仕事をするうえで不便なこと、(4)仕事は順調でも将来日本へ帰るか否かおよび当地の生活の持つ意味等について、アンケート調査を行い、回答してくれた人にヒアリング調査をした。

2. アンケート調査の結果

2016年1月、タイ王国和僑会(当時。現WAOJEバンコク支部)元代表の谷田貝良成氏のご協力のもと、東南アジア和僑の方へアンケート調査を行い、27人の方から回答をいただいた。

内訳はタイ 10 人、ミャンマー 11 人、フィリピン 3 人、シンガポール、マレーシア、ベトナム各 1 人である。回答の多かったタイとミャンマーを中心とし、フィリピン、シンガポール、マレーシア、ベトナムをその他 4 か国として一括して扱う。2016 年 3 月、アンケートに回答してくれた方の中からタイで 6 人、ミャンマーで 5 人にヒアリング調査を行った。本文中に取り上げるときは、タイの 6 人を A 氏～F 氏とし、ミャンマーの 5 人を G 氏～K 氏とする。また、アンケートのみの方を取り上げるときは、タイの 4 人を L 氏～O 氏とし、ミャンマーの 6 人を P 氏～U 氏、フィリピンの 3 人を V 氏～X 氏、マレーシアの人を Y 氏、ベトナムの人を Z 氏として表示した。

2.1. 出身地

人口の多い関東と関西の出身者が多く、特に偏りは見られない(表 1)。強いて言うと、人口の割に四国が多く、北海道・東北・中国地方出身者はいない。

2.2. 当地へ来た当初の目的

表 2 のように 27 人中 21 人が仕事で、留学が 2 人、その他が 4 人である。当然ながら仕事で来た人が圧倒的に多い。その他の内訳は、アルバイト、

表 1 和僑の出身地

出身地	タイ	ミャンマー	その他 4 か国	合計
関東	4	6	0	10
東海	1	0	2	3
関西	2	2	2	6
四国	1	2	1	4
九州	2	1	1	4
合計	10	11	6	27

表 2 当地へ来た当初の目的

目的	タイ	ミャンマー	その他 4 か国	合計
仕事	7	11	3	21
留学	0	0	2	2
家族と来た	0	0	0	0
当地の人との結婚	0	0	0	0
その他	3	0	1	4

NGO、フラッと来た各 1 人、無回答 1 人である。

2.3. 当地の言葉(現地語)の学習について

当地の言葉を学習したことがある人は表 3-1 のように、全体で 70.4%、英語があまり通じないタイで 8 割、タイほどではないが、シンガポール、フィリピン、マレーシア 3 か国に比べると英語があまり通じないミャンマーでも 8 割弱である。やはり上記 3 か国に比べると英語があまり通じないベトナムではもちろん、フィリピンやマレーシアでも現地語を学習している。現地語を学習していないのは、シンガポールとフィリピン(2 人)併せて 3 人である。

現地語学習歴のある人の学習期間は表 3-2 のとおりである。学習歴のある 11 人中、6 か月未満が半数近い 5 人と短い。

2.4. 当地の人に意思を伝えることは可能か

当地の人への意思の伝達について聞いた(全く不可能を 0、あまりできないを 1、まあまあ可能を 2、可能を 3 ポイントとし、合計点を回答者数で除して算出した)。

表 3-1 当地の言葉(現地語)の学習経験

学習経験	タイ	ミャンマー	その他 4 か国	合計
ある	8	8	3	19
ない	2	3	3	8

表 3-2 現地語学習歴のある人の学習期間

学習期間	タイ	ミャンマー	その他 4 か国	全体
6 か月未満	1	4	0	5
6 か月～1 年未満	2	0	1	3
1 年以上	1	2	0	3
無回答、その他	4	2	2	8

表 4 当地の人との意思の疎通

意思の疎通	タイ	ミャンマー	その他 4 か国	合計
全く不可能	0	0	0	0
あまりできない	2	3	0	5
まあまあ可能	2	8	2	12
可能	6	0	4	10
可能度	2.40	1.73	2.67	2.19

表4のとおり回答者27人中、当地の人への意思の伝達は当然ながら全く不可能は0であるが、あまりできないは5人（タイ2、ミャンマー3）いた。意思伝達の可能性はミャンマーが1.73とタイ（2.40）、その他4か国（2.67）と比べてかなり低かった。その理由として、5の使用言語と6の滞在期間が関係していると思われる。

2.5. 意思の伝達が可能な場合の使用言語

表5のとおり最も多いのは現地語+日本語+英語のミックスで、回答者26人中8人（30.1%）である。2位は英語で6人（23.1%）、3位は同率で現地語と現地語+日本語+英語で各4人（15.4%）、5位は日本語+英語で3人（11.5%）である。英語を含むものは21人で84.6%に達し、当然ながら意思の伝達には英語が必須である。現地の人との深いコミュニケーションには、現地語

表5 可能な場合（まあまあ可能を含む）使用する言語

使用する言語	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
現地語	3	1	0	4
日本語	0	1	0	1
英語	0	3	3	6
現地語+日本語	0	0	0	0
現地語+英語	3	1	0	4
現地語+日+英	3	3	2	8
日本語+英語	0	2	1	3

表6-1 現在の仕事

現在の仕事	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
現地で起業	7	5	5	17
現地企業に勤務	1	1	1	3
日本企業から派遣	2	5	0	7

表6-2 国別の滞在期間（ ）内は現地で起業した人

滞在期間	タイ	ミャンマー	その他4か国
1年未満	1 (0)	1 (0)	1
1～3年未満	2 (1)	6 (3)	0
3～5年未満	1 (1)	3 (3)	1
5～10年未満	1 (1)	0 (0)	2
10年以上	5 (4)	1 (1)	1
無回答	0	0	1
計	10 (7)	11 (7)	6

が不可欠と考えられるが、何らかの形で現地語を使用する人は、タイで100%、ミャンマーでは45.5%で、タイよりミャンマーがかなり低い。その他4か国は33.3%で、ミャンマーより低いが、前述のようにシンガポール、フィリピン、マレーシアは英語がミャンマーより通じるからだと考えられる。それほど通じないベトナムでは、日英とのミックスであるが、現地語を使用している。

2.6. 現在の仕事について

表6-1のとおり現在の仕事は現地で起業が27人中18人で66.7%と圧倒的に多い。日本企業から派遣が6人（22.2%）、現地（日系）企業に勤務は3人のみである（11.1%、派遣された会社を定年退職後、別の現地日系企業に勤務および現地で設立された日系企業の雇われ社長を含む）。起業の理由は積極的なものが多いが、中には「ボランティアで来たが帰れなくなったため」（タイL氏）や「出張ベースでは相手にされないため」（ベトナムZ氏）のような前向きといえない事例もある。企業から当地へ派遣された人は全員希望して派遣されている。

滞在期間は、3年以上がタイで10人中7人（70%）、ミャンマー11人中4人（36.4%）、その他4か国で5人中4人（80%）と、ミャンマー滞在期間が短いことが明らかである。

現地滞在期間を分けると表6-2のとおりである。

2.7. 当地で働いている理由

当地で働いている理由について、(1) 住みやすいから、(2) 仕事がしやすいから、(3) 当地の人がフレンドリーだから、(4) 当地の人と結婚しているから、の4つについて聞いた（違うを0、やや違うを1、まあそうだと2、そのとおりを3ポイントとし、合計点を回答者数で除して算出した）。

(1) 当地が住みやすいから（表7-1）

住みやすいからについては、タイ（2.30）はもちろん、その他4か国（2.00）も「まあそうだと」の2ポイントを超えているが、ミャンマーは1.55

表 7-1 当地の住みやすさ

回答	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
違う	1	3	0	4
やや違う	1	1	2	4
まあそうだ	2	5	2	9
そのとおり	6	2	2	10
住みやすさ	2.30	1.55	2.00	1.93

表 7-2 当地の仕事のしやすさ

回答	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
違う	2	2	1	5
やや違う	3	3	1	7
まあそうだ	2	6	2	10
そのとおり	3	0	2	5
仕事のしやすさ	1.60	1.36	1.83	1.56

表 7-3 当地のフレンドリー度

回答	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
違う	1	1	0	2
やや違う	1	1	1	3
まあそうだ	5	8	3	16
そのとおり	3	1	2	6
フレンドリー度	2.00	1.82	2.17	1.96

表 7-4 当地の人との結婚

回答	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
違う	0	0	0	0
やや違う	0	0	0	0
まあそうだ	0	1	0	1
そのとおり	1	0	0	1

で、「やや違う」と「まあそうだ」のほぼ中間値と低く、それほど住みやすいとは感じていない。ヒアリングによると、タイでは6人中5人が住みやすいと答えている。D氏1人だけが病気のことや道路の渋滞などから住みやすくないと答えている。ミャンマーは5人中2人が住みやすくないと答えている。住みやすくない理由として、H氏「日本での（住みやすいとの）報道と違って」、K氏「停電や断水があるから」と答えている。

(2) 当地は仕事がしやすいから (表7-2)

仕事がしやすいからについては、「まあそうだ」の2ポイントを超えるところはなく、その他4か国が1.83、タイでも中間値を少し超える1.60、ミャンマーに至っては中間値にも届かない1.36で、仕事がしやすいと感じている人は少ない。ヒアリングによると、タイでは6人中3人が仕事はしやすくないと答えている。その理由に、B氏「仕事が芳しくない」、D氏（在タイ10か月）「コミュニケーションに日本の3倍かかる」ことをあげている。一方、ミャンマーでは、5人中4人が仕事はしやすいと答えており、アンケート結果とは異なっている。ただし、1人（H氏）はアンケートでは日本人相手なのでやりやすいとのことであるが、ヒアリングでは仕事自体はしやすくないと答えている。仕事はしやすくないと答えたK

氏は「ルール変更が行き渡らない」ことを理由にあげている。

(3) 当地の人はフレンドリーだから (表7-3)

当地の人がフレンドリーだからについては、その他4か国が2.17、タイが2.00で「まあそうだ」の2ポイントを超えている。ミャンマーは1.82で、「住みやすいから」と「仕事がしやすいから」を上回っている。ヒアリングによると、タイでは6人中4人が当地の人がフレンドリーだと答えている。ミャンマーでは、5人中2人が当地の人はフレンドリーでないと答えている。H氏は「表面とは違う」、K氏は「フレンドリーな人は騙しに来ている」と厳しい回答である。H氏はボランティア活動でミャンマーに来ることになり、学校づくりに役立ちたいと考えており、K氏は妻がミャンマー人で、2人ともミャンマーのことを深く知るにつれ、批判的になるのかもしれない。

(4) 当地の人と結婚しているから (表7-4)

当地の人と結婚しているからについては、27人中タイで1人、ミャンマーで1人（前述K氏）の2人だけであり、当地の人と結婚しているからという事例は非常に少なかった。

2.8. 当地で仕事をするうえで日本より有利なこと

当地で仕事をするうえで日本より有利なことについて、(1) 当地は仕事のチャンスが日本より多いか、(2) 当地の人は日本人よりフレンドリーであるかの2つについて聞いた(違うを0、やや違うを1、まあそうだと2、そのとおりを3ポイントとし、合計点を回答者数で除して算出した)。

(1) 当地は仕事のチャンスが日本より多いかについて(表8-1)

タイとその他4か国が2.40、ミャンマーも2.36で「まあそうだ」の2ポイントを大きく超えている。すべての国の和僑が当地は仕事のチャンスが日本より多いと感じている。ヒアリングによると、タイでは6人中4人が仕事のチャンスが日本より多いと答えている。その理由として、A氏「(タイにいる)日本人から頼られ、ビジネスの案件が入ってくる」や会計士のE氏「タイ人の会計士は締め切りを守らないため、日系企業から仕事がある」のように、日本人や日系企業からの仕事が多いことがあげられる。また、日本企業から派遣されているC氏は「ASEAN全体の市場拡大が見込める」としている。ミャンマーでは5人全員が仕事のチャンスが日本より多いと答えている。日本にいるよりも「大手の人と会え」(建築設計会社のI氏)たり、「著名人と対談できる」(情報

表8-1 当地の仕事の有利度

回答	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
違う	0	0	0	0
やや違う	2	1	0	3
まあそうだ	2	5	3	10
そのとおり	6	5	2	13
有利度	2.40	2.36	2.40	2.38

表8-2 仕事をするうえでの現地の人フレンドリー度

回答	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
違う	0	1	0	1
やや違う	2	1	0	3
まあそうだ	3	7	3	13
そのとおり	5	2	2	9
フレンドリー度	2.30	1.91	2.40	2.15

誌のJ氏)ことをあげている。また、「何もないので」(H氏)、「日本やタイよりチャンスが多い」(K氏)といえるのかもしれない。

(2) 仕事をするうえで現地の人フレンドリーか(表8-2)

その他4か国が2.40、タイも2.36に対して、ミャンマーは1.91と「まあそうだ」の2ポイントを下回っている。ヒアリングによると、タイでは仕事のチャンスと同様に6人中4人が仕事をするうえで現地の人フレンドリーと感じているが、前出の「仕事が芳しくない」ためか、B氏は現地の人フレンドリーだと思っていない。やはり前出でメキシコ留学経験のあるD氏は、「日本人よりフレンドリーだが、メキシコ人よりはフレンドリーでない」と感じている。ミャンマーでは5人中3人が仕事をするうえで現地の人フレンドリーと感じているが、うち1人の日本企業から派遣されているI氏は表面的にはフレンドリーと答えている。2.7.(3) 当地の人がフレンドリーかということに、厳しい回答をしたH氏とK氏は、仕事の上でもミャンマー人は日本人よりもフレンドリーとはいえないと回答している。

2.9. 当地で仕事をするうえで不便なことについて

当地で仕事をするうえで不便なことについて、聞いた(全くないを0、ほとんどないを1、少しあるを2、大いにあるを3ポイントとし、合計点を回答者数で除して算出した)(表9)。

その他4か国が2.50、ミャンマーは2.45と「大いにある」と「少しある」の中間値である。それに対して、タイ(1.90)は2ポイントを少し下

表9 当地で仕事をするうえでの不便度

回答	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
全くない	1	0	0	1
ほとんどない	2	1	0	3
少しある	4	4	3	11
大いにある	3	6	3	12
不便度	1.90	2.45	2.50	2.26

回っている。ヒアリングによると、タイでは仕事
がしやすく、タイ人はフレンドリーで、仕事の
チャンスも多いと高く評価している前出会計士の
E氏も、「法令の違い」で不便なことが大いにある
と答えている。他にも不便なこととして、A氏
「インフラ未整備」、C氏「商習慣の違いで納
期を守らない」ことを挙げている。かなり以前か
ら外資系企業が進出し、中進国入りしているタイ
でさえ、不便なことがあるので、民主化してから
間がないミャンマーでは、不便なことがより多い。
ヒアリングによると、「インフラ未整備」(H氏)
はもちろんのこと、法律が整備されていないこと
の影響が大きいようである。ミャンマーでは仕事
がしやすく、ミャンマー人はフレンドリーで、仕
事のチャンスも多いと高く評価している会計士の
G氏は「法律の建付けと運用が違い、担当者任
せ」で大いに不便であると答えている。また、
「住みやすく、変化が著しくワクワクする、ミヤ
ンマー人はフレンドリーで気持ち良い」と非常に
評価の高い、前出J氏も「法律や税制がしょっ
ちゅう変わる」ことに不便さが少しあると感じて
いる。

**2.10. 当地で仕事をするうえで困ったことが
あったときの相談相手 (表10)**

回答者26人中、日本人が10人、現地の人が
11人、両方が4人、その他(信頼できる人)が1
人であり、日本人より現地の人の方が多いという
結果となった。特に仕事上の困難が多いと考えら
れるミャンマーで、日本人4人(36.4%)、ミヤ
ンマー人6人(54.5%)、両方1人(9.1%)で、
日本人より現地ミャンマー人の方が多かった。こ
れをどのように理解すべきであろうか。ヒアリン
グによると、ミャンマーでは、I氏「富裕層で信

表10 当地で仕事をするうえで困ったことがあったとき
の相談相手

相談相手	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
日本人	4	4	2	10
現地の人	4	6	1	11
両方	2	1	1	4
その他	0	0	1	1

頼できる現地人パートナー」やK氏「ミャン
マー人の有力者」に相談すると答え、アンケート
にも現地(ミャンマー)パートナーに相談すると
記入されているものがあった。ミャンマーは日本
企業の進出がまだ少ないので、ミャンマー人に相
談せざるを得ないのではないかと考えられる。

2.11. 和僑会に加入した理由について

和僑会加入者への調査のため、和僑会に加入し
た理由を尋ねた。その理由について、(1)相談相
手が必要だったからか、(2)日本人の仲間が必要
だったからかの2つについて聞いた(違うを0、
やや違うを1、まあそうだと2、そのとおりを3
ポイントとし、合計点を回答者数で除して算出し
た)。

(1) 相談相手が必要だったから (表11-1)

相談相手が必要だったからかについて、タイは
0.67、その他4か国が0.75と「やや違う」の1ポ
イントを大きく下回っている。それに対して、
ミャンマーは1.82と「まあそうだ」の2ポイン
トを少し下回る程度まで高くなっている。その違
いはヒアリングによると、タイで6人中(アン
ケート回答者10人でも)1人だけ「そのとおり」
と回答しているC氏は、タイ進出前から和僑会
に世話になったと答えている。ミャンマーでは、
5人中3人が「相談相手が必要だったから」と答
えている。K氏がいうように「ミャンマーは日本
人が少ない」から和僑会を相談相手として必要だ
と考えられる。

(2) 日本人の仲間が必要だったから (表11-2)

日本人の仲間が必要だったからかについて、

表11-1 相談相手の必要度

回答	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
違う	5	2	1	8
やや違う	3	3	1	7
まあそうだ	0	4	1	5
そのとおり	1	3	0	4
必要度	0.67	1.82	0.75	1.21

表 11-2 日本人の仲間の必要度

回答	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
違う	2	0	1	3
やや違う	1	2	0	3
まあそうだ	3	5	3	11
そのとおり	3	4	0	7
その他	0	0	1	1
必要度	1.78	2.18	1.50	2.00

ミャンマーは2.18で「まあそうだ」の2ポイントをやや上回り、タイは1.78で少し下回り、その他4か国が1.50で「まあそうだ」と「やや違う」の中間値となった。3者とも前の問いの相談相手が必要だったからをかなり上回っている。ヒアリングによると、ミャンマーでは5人全員が日本人の仲間が必要だとしている。日本人の仲間が必要な理由として、「ミャンマーは情報が少ないので、情報を聞くことができる」(和僑会副会長のH氏)ことや「和僑会による日本人同士の相互扶助の必要性」(ミャンマー和僑会創設に参加したJ氏)を挙げている。タイは6人中4人が日本人の仲間が必要だとしている。必要な理由として、「日本人との情報交換」(B氏)やそれに加えて「会社とのつながりを考慮して」(日本企業から派遣されているD氏)と答えている。タイでも日本人同士の情報交換は重要であり、その面で和僑会は役立っているといえよう。

2.12. 和僑会以外で日本人同士で集まることについて

ミャンマーはアンケートに回答した11人全員があると答え、タイは9人中7人(77.8%)、その他4か国で4人中3人(75%)があると答え、非常に高率となっている(表12-1)。集まる回数別の人数を見ると、表12-2のとおりである。

和僑会以外で日本人同士で集まるのは、年数回から101回以上・常にまでさまざまである。ヒアリングによると、タイでは県人会や大学の同窓会、日本に住んでいた時の沿線の会(D氏)、顧客とのゴルフなどさまざまである。ミャンマーではタイと同様に、郷土の会や仕事関係のほかに、同年

表 12-1 和僑会以外で日本人同士で集まることについて

	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
ある	7	11	3	21
ほとんどない	2	0	1	3
全くない	0	0	0	0

表 12-2 和僑会以外で日本人同士で集まる回数別人数

年間に集まる回数	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
10回以下	1	3	0	4
11～30回	3	3	1	7
31～50回	1	0	0	1
51～100回	1	2	0	3
101回以上・常に	1	1	2	4

代の集まり(H氏)や50～60人集まる女子会(G氏)もあるという。

2.13. 現地の友人について

現地の友人がいる人はタイで10人中8人(80.0%)、ミャンマーは11人中10人(90.9%)、その他4か国では5人全員で100%である(表13-1)。現地の友人がいない人は、ヒアリングによると、タイでは2人とも企業派遣で、タイ語ができず、現地の人とは仕事以外では接点がない(C氏、D氏)ようである。ミャンマーのヒアリングでは現地の友人がいない人はないが、アンケートではいない理由が書いていないので、どのような状況かは不明である。

現地の友人がいる人のうち友人の数を人数別にするると表13-2のとおりである。

表 13-1 現地の友人について

	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
いる	8	10	5	23
いない	2	1	0	3

表 13-2 現地の友人数

友人の数	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
5人以下	3	2	1	6
10人程度	0	6	1	7
20人程度	1	0	0	1
100人程度	1	0	1	2

5人以下(6人)から10人(7人)程度までで計13人となり、81.3%を占める。ただし、会社の人を友人に含めると考えるかどうかにより異なる。ミャンマー和僑会の事務局を担当しているG氏は、仕事関係を含めると50人程度だが、仕事以外では2人という答えであった。ヒアリングによると、タイの会計士で留学経験のあるE氏はタイ人は「日本人より英語が上手なので英語で話し」たり、ミャンマーの情報誌経営のJ氏は「日本人よりミャンマー人の方が多い」とのことである。

2.14. 仕事が順調でも将来日本へ帰るかについて

アンケートでは、帰国するつもりがタイで5人、ミャンマーで6人、その他4か国で2人の計13人で、未定の3人を除いて、回答者23人で除すと、56.5%となり、帰国するつもりの方が多い(表14-1)。しかし、アンケートの帰国するつもり理由を読むと、帰国するつもりと回答した中に「違う国に行くかもしれない」(ミャンマーJ氏)、「特にどこに住むかの制限は設けていない」(フィリピンW氏)との回答があり、またヒアリングでも「月の半分は日本で後進の指導をしたい」(タイF氏)など、日本への永住帰国を考えていない3人を除くと、帰国するつもりと帰国するつもりはないは丁度半々になる。

帰国意思を現在の仕事別に分けると表14-2のとおりである。

表 14-1 仕事が順調な場合の帰国意思

	タイ	ミャンマー	その他4か国	合計
帰国するつもり	5	6	2	13
帰国するつもりはない	4	5	1	10
未定	1	0	2	3

表 14-2 仕事別の帰国意思

現在の仕事	起業	現地企業	企業派遣	合計
帰国するつもり	5	0	5	10
帰国するつもりだが永住ではない	3	0	0	3
帰国するつもりはない	6	2	2	10
未定	3	0	0	3

2.15. 当地の生活の持つ意味について

当地の生活の持つ意味について自由に記述してもらった。帰国意思別と現在の仕事別に分けて示す。併せて「帰国するつもりまたは帰国するつもりはない」理由も記す。

(1) 帰国するつもりの方の理由と当地の生活の持つ意味

1) 起業している人

タイ

	A氏	L氏
理由	セミリタイア後、日本を旅行したい(A氏は若い時に渡タイ)	両親の面倒を見る
当地の生活の持つ意味	ビジネスチャンス、お世話になったタイに沢山の笑顔と幸せを生み出すことで恩返ししたい	まずは配偶者がタイ人なので、ここが拠点になる。しかし、ここでなければいけないということはない。日本とタイを行き来するような生活も考えている

ミャンマー

	H氏	U氏
理由	日本人だから老後は日本で生活したい	無記入
当地の生活の持つ意味	「自らのビジネス展開」。ヒアリングで補足すると、「チャンスの多いミャンマーでどれだけ実現できるか」ということである。	無記入(調査時点起業21年)

ベトナム

	Z氏
理由	海外は仕事の間所であって安住の地ではない。アウエーよりホームの方がまだ安心
当地の生活の持つ意味	外国人がよその国でビジネスを展開するのは相当に厳しい、特に我々のように現地企業を相手にビジネスを展開していくのは相違(容易)な事ではない。理想は自分たちの国(ホーム)で地の利を生かした自分たちが有利な場所でビジネスをするのが理想だし、是非ともお勧めしたい。それだけ自国はビジネスをする上では環境に恵まれている。(但し、ビジネスが成功するかは別の話)我々はアウエイの中に飛び込みビジネスをしている。常にリスクを背負い、順調に進んでいても明日、どうなるか常に不安を抱えて生きている。何があってもどんなことがあっても自分で諦めない気持ちを強く持たないとこの国では生き抜く事は出来ない。その厳しさを教えてもらっている。この国で起業する事は個人的にはお勧めできないが、この国ではやった分の結果は確実にでる。その分チャンスは多い。

起業していて帰国するつもりの人理由は様々である。「老後は日本で生活したい」(H氏)や「海外は仕事の場所であって安住の地ではない」(Z氏)は、「老後の安定」を求めていると理解できる。「(若い時に渡タイしたので)セミリタイア後、日本を旅行したい」(A氏)も老後の安定の一種と考えられる。「両親の面倒を見る」(L氏)は帰国の大きな理由となると思われる。U氏は理由が無記入であるが、調査時点で起業して21年経過しているにもかかわらず、帰国するつもりなのは、理由として老後の安定か両親の面倒を見る必要があるためと考えられる。当地の生活の持つ意味は、帰国するつもりでも、タイに「恩返ししたい」(A氏)、「チャンスの多いミャンマーでどれだけ実現できるか」(H氏)、「やった分の結果は確実にでる。その分チャンスは多い」(Z氏)と皆前向きである。

2) 企業から派遣されている人

タイ

	C氏	D氏
理由	ASEAN 主要国への進出ができれば日本本社へ戻る	親がいるため
当地の生活の持つ意味	日本以外の第2, 第3の母国市場を創りにきている。各国の軒下を借りて商売させてもらっているという意識と現地の方々にリスペクトすることが大切だと思う。	仕事をする上で学べる。スキルアップにつながると思う。

ミャンマー

	G氏	P氏	Q氏
理由	税理士なので日本の税法をキャッチアップしたい。ミャンマーの税法は緩やかなので何とかなる	あくまでも生活拠点は日本であるため	チャンスがあれば(Q氏はアンケートのみのため、詳細は不明)。
当地の生活の持つ意味	ASEAN 諸国の中でも1, 2の親日国。仏教国で上座部仏教の生活を直に感じながら、アセアンビジネスを体現していただけることは、大変有意義。	人生経験の幅を広げる、仕事のキャリアの幅を広げる	鍛錬、新たな生活・世界

企業から派遣され、帰国するつもり人の理由は、「主要国への進出ができれば日本本社へ戻る」(C氏)や「日本の税法をキャッチアップしたい」(G氏)も結局はP氏と同様に「あくまでも生活拠点は日本であるため」であろう。起業した人と同じ、「親がいるため」(D氏)という理由もある。当地の生活の持つ意味は、「アセアンビジネスを体現していただけることは、大変有意義」(G氏)、「各国の軒下を借りて商売させてもらっているという意識」(C氏)、「仕事をする上で学べる」(D氏)、「仕事のキャリアの幅を広げる」(P氏)と起業した人と同様に前向きである。

帰国するつもり人の理由は大きくは、老後の安定3人、親の面倒を見る2人、生活拠点は日本であるため3人、不明・無回答2人に分かれるといえよう。

3) 帰国するつもりと回答したが、永住は考えていない人

	タイ F氏
理由	ある程度仕事が委譲出来て、時間を作り、後進の教育をしたい。ヒアリングでは、月の半分は日本へ行くということであった。
当地の生活の持つ意味	タイを含めて日本という価値・ブランドは素晴らしいものがあるにもかかわらず、伝わっていないことが多い。そのことをより世界に知ってもらい、利用してもらい、満足してもらい、そして日本を好きになってもらうことが先人の方の歩んできたものをつなぐことだと考えている。

	ミャンマー J氏	フィリピン W氏
理由	ヒアリングでは「違う国に行くかもしれない」とのことであった。	特にどこに住むかの制限は設けていない
当地の生活の持つ意味	変化著しい国において、ビジネスチャンスは無限にある。	ただ、おもしろいからやっているだけで特に何も考えていない。

帰国するつもりと回答したが、永住は考えていない人の理由は、F氏は「後進の教育をしたい」ので、「月の半分日本へ行く」き、日本とタイに半々に住むということであるのに対して、J氏「違う国に行くかもしれない」、W氏「特にどこに住むかの制限は設けていない」と住む国を日本ともミャンマーあるいはフィリピンとも決めていないということである。当地の生活の持つ意味は、

「日本を好きになってもらうことが（タイに来た）先人の方の歩んできたものをつなぐことだと考えている」（F氏）、「ビジネスチャンスは無限」ととらえる（J氏）、「おもしろいからやっているだけ」（W氏）と三者三様である。

(2) 帰国するつもりはない人の理由と当地の生活の持つ意味

1) 起業している人

タイ

	B氏	E氏	N氏
理由	「仕事が芳しくない」が「頑張ればうまくいくと考えている」ため。	自分の会社を作り、日本よりストレスが少ないので、総合的に考えて。	日本より住みやすいから。
当地の生活の持つ意味	第2の人生の場。ヒアリングで補足すると、新しい展開を欲していた。10年先を見通せるのは面白くない。全部変えたから楽しい、難しいが夢がある。	生活の場、仕事の場、自己実現の場、肩の力を抜いて生きていける場所。	一生付き合っていきたい、日本には旅行に行く程度

ミャンマー

	S氏	T氏
理由	無記入	無記入
当地の生活の持つ意味	自分自身の将来に直結している。	生活する為、仕事する為

起業していて帰国するつもりのない人の理由と当地の生活の持つ意味は、タイとミャンマーで異なっている。まず、理由であるが、タイは「日本よりストレスが少ない」（E氏）、「日本より住みやすいから」（N氏）で、「仕事が芳しくない」B氏でも「頑張ればうまくいくと考えてい」て、かなり前向きである（ミャンマーではS氏とT氏は理由は無回答）。したがって、当地の生活の持つ意味もタイでは、「難しいが夢がある」（B氏）、「肩の力を抜いて生きていける場所」（E氏）、「一生付き合っていきたい」（N氏）とやはりかなり前向きに考えている。一方、ミャンマーでは「将

来に直結している」（S氏）、「生活する為」（T氏）と現実的である。

2) 現地採用の人

	タイ O氏	ミャンマー K氏	フィリピン V氏
理由	「日本の冬は体に堪える、タイは生活費があまりかからず、年金だけで生活ができる」から。	K氏は妻がミャンマー人「日本には保険も年金もなく未練もないので、帰る理由がない」と日本との関係を断っているため。	無記入
当地の生活の持つ意味	当初5年といわれた前の会社で現地の社長が急死し、その後処理を従業員と共にやり、たて直した経験が人を作ったり、次の会社（現在の会社）へ即就職し、タイで創業された現社長の元で、現在まで仕事をさせてもらえた事がありありがたい事だと思っている（調査時点在タイ34年）。	生活も仕事も生きるため。ヒアリングで補足すると、いつまでトラックの輸入が可能かわからないため、危機感があり必死だということであった。	日本では見れないこと、経験できないことがある。良い意味でも悪い意味でも。若いうちはなんでもやってみる。重要だと考えているので、できるだけ珍しい経験、人と違う経験をたくさんやっていきたい。それが可能なのが、海外なのかなと思っている。

現地採用され帰国するつもりのない人は3人で、国も違うため、理由と当地の生活の持つ意味は、異なっている。タイO氏の理由は、高齢なため「日本の冬は体に堪える、タイは生活費があまりかからず、年金だけで生活ができる」からであり、それだけタイが住みやすいからと理解できる。ミャンマーでは「日本には保険も年金もなく未練もない」（K氏）と他の選択肢がないためと考えられる。フィリピンV氏は理由は無記入。

当地の生活の持つ意味は、O氏は「現在まで仕事をさせてもらえた事がありありがたい」と感謝し、フィリピンV氏は「人と違う経験をたくさんやっていきたい」と、前向きである。一方ミャンマーでは「生活も仕事も生きるため」（K氏）と切迫感が感じられる。

3) 企業から派遣されている人

ミャンマー

	I氏	R氏
理由	(会社を背負うストレスと食事が合わないため10 kg瘦せた)日本では仕事をこなすだけだが、ミャンマーでは何かが起こりそうだから。	無記入
当地の生活の持つ意味	まだ3か月なので、これから(意味を考える)。	challenging

企業からの派遣であるが、帰国するつもりのない人は2人だけで、ともにミャンマーである。理由をI氏は「(会社を背負うストレスと食事が合わないため10 kg瘦せたにもかかわらず)日本では仕事をこなすだけだが、ミャンマーでは何かが起こりそうだから」と、ミャンマーへの期待を寄せている。R氏は理由は無記入。当地の生活の持つ意味について、I氏は「ミャンマーに来てまだ3か月なので、これから(意味を考える)」ということだが、R氏は「challenging」と回答している。challengingにはいくつかの意味があるが、困難だがやりがいがある、と理解したい。I氏の帰国するつもりのない理由とR氏の当地の生活の持つ意味を合わせて考えると、ミャンマーに未知の期待を抱いていると感じられる。

帰国するつもりはない人の理由は大きくは、現地に日本以上の魅力を感じている人が7人、生活のためという人が3人と分けるといえる。

(3) 帰国するか未定の人の理由と当地の生活の持つ意味

	タイ M氏	フィリピン X氏	マレーシア Y氏
理由	無記入	行き来を頻繁にしているので解らない。	無記入
当地の生活の持つ意味	わたくしの仕事は(1)日本語学校(2)日本留学支援(3)就職支援です。そのため、現地人を相手にすることが前提であるため、タイにいることそのものが仕事をするうえで必要です。	将来の日本を救う為に現地に根付いて仕事を行っているつもりである。	偶然選んだマレーシアだが、マレーシアを選んで良かったと思う。

帰国するか未定の人は3人とも起業している。理由は、「行き来を頻繁にしているので解らない」(フィリピンX氏)、他の2人タイM氏とマレーシアY氏は無記入である。当地の生活の持つ意味は、日本語学校を経営するM氏は「現地人を相手にすることが前提であるため、タイにいることそのものが仕事をするうえで必要で」あり、同じく語学学校を経営するY氏は「(友人からの勧めで起業し)偶然選んだマレーシアだが、マレーシアを選んで良かったと思う」と記入している。2人とも現地にいることそのものが仕事をするうえで必要であるが、帰国するかどうか決めかねている。現地に外国人として骨を埋めるのは大きなリスクが伴うため、それほど大きな決断なのであろう。それだけに帰国するつもりはないと考えている10人にとって現地は大きな魅力に違いない。

おわりに

調査を通して、以下のことが明らかとなった。(1) 当地で働いている理由について、タイでは住みやすいが、仕事はあまりしやすすくない、当地の人はフレンドリーであると感じている。ミャンマーではそれほど住みやすくない、仕事もしやすすくない、当地の人はある程度フレンドリーであるが、日本での報道とは違うと感じている。(2) 当地で仕事をするうえで日本より有利なことは、タイではチャンスは多く、当地の人は仕事上でもフレンドリーであると感じている。ミャンマーでもチャンスは多いが、当地の人は仕事上でタイほどフレンドリーであると感じていない。(3) 当地で仕事をするうえで不便なことは、タイでは少しあると思っている。ミャンマーでは大いにあると考えている。(4) 仕事が順調でも将来日本へ帰るか否かおよび当地の生活の持つ意味については、帰るつもりの人と帰るつもりのない人は実質的に半々である。帰るつもりの人理由は老後の安定3人、親の面倒を見る2人、生活拠点は日本であるため3人、不明・無回答2人である。帰るつもりのない人の理由は、現地に日本以上の魅力を感じている人が7人、生活のためという人が3人で

ある。

【注】

- 1) 『朝日新聞』2014年10月15日。
- 2) 和僑会の定義は香港和僑会のホームページ (<https://www.wa-kyo.org/>) に書かれているものである。©2019 by NPO Hong Kong Wakyokai Ltd.
- 3) 渡辺賢一『和僑 15人の成功者が語る実践アジア起業術』アスペクト, 2007年。
- 4) 佐脇英志「3スタートアップイノベーション: ASEAN日本人起業家が織りなす新イノベーション」『世界経済評論』Vol. 62 No. 6, 2018年。
- 5) 佐脇英志「アセアン ASEAN日本人起業家の研究: ミャンマーの事例」第26回アジア経営学会東部部会報告資料, 2019年。
- 6) 佐脇英志「日本人起業家の巨大インキュベーションセンター@セブ・フィリピン」『世界経済評論』IMPACT webコラム, 2019年。
- 7) 堀内弘司「華僑ならぬ和僑に関するユニークな研究 研究テーマ: キャリア充実を求め、中国に越境し起業する和僑たち」, 2011年。
- 8) 堀内弘司「中国に越境する和僑起業家のエスノグラフィ―日本人のトランスナショナル化に関する事例研究―」, 2012年。
- 9) 野村進「アジア定住 11カ国18人の日本人」, 1996年。
- 10) 須藤みか『上海ジャパニーズ―日本を飛び出した和僑24人』, 2007年。
- 11) 赤木攻『タイの永住日本人』, 1992年。
- 12) 趙夢雲「上海の『和僑』の生活諸相: アンケート調査からその意識と特徴を析出する」, 2011年。

【参考文献】

- [1] 赤木攻『タイの永住日本人』めこん, 1992年。
- [2] 野村進『アジア定住 11カ国18人の日本人』めこん, 1996年。
- [3] 須藤みか『上海ジャパニーズ―日本を飛び出した和僑24人』講談社, 2007年。
- [4] 渡辺賢一『和僑 15人の成功者が語る実践アジア起業術』アスペクト, 2007年。
- [5] 堀内弘司「華僑ならぬ和僑に関するユニークな研究 研究テーマ: キャリア充実を求め、中国に越境し起業する和僑たち」早大中国塾 (2011年, 2010年12月での講演修正版)
- [6] 堀内弘司「中国に越境する和僑起業家のエスノグラフィ―日本人のトランスナショナル化に関する事例研究―」早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士論文, 2012年。
- [7] 趙夢雲「上海の『和僑』の生活諸相: アンケート調査からその意識と特徴を析出する」『ASIA: 社会・生活・文化』(1),

- 2011年。
- [8] 桑野淳一・大西純『タイ駐在のタイ入門』連合出版, 2012年。
- [9] 田村克己・松田正彦編著『ミャンマーを知るための60章』明石書店, 2013年。
- [10] 楡周平『和僑』祥伝社, 2015年。
- [11] 下川裕治編『本社はわかってくれない―東南アジア駐在員はつらいよ』講談社, 2015年。
- [12] 鈴木岩行「ミャンマーにおける日系企業のコア人材育成」『和光経済』第47巻第2号, 2015年。
- [13] 鈴木岩行「日本中小企業のアジア展開―1990年代以降の岐阜アパレル・縫製業を中心に」和光大学経済経営学部編著『17歳からはじめる経済・経営学のススメ』日本評論社, 2016年。
- [14] 水谷俊博, 堀間洋平編著『ミャンマー経済の基礎知識』ジェトロ, 2017年。
- [15] 中川涼司・高久保豊編著『現代アジアの企業経営―多様化するビジネスモデルの実態』ミネルヴァ書房, 2017年。
- [16] 鈴木岩行「タイにおける日系企業のコア人材育成」『和光経済』第50巻第3号, 2018年。
- [17] コンダカル・ミザヌル・ラハマン「タイにおける人的資源管理」, コンダカル・ミザヌル・ラハマン『アジアにおける人的資源管理―その実践・理論・文化』第7章, 中央大学出版部, 2018年。
- [18] 佐脇英志「3スタートアップイノベーション: ASEAN日本人起業家が織りなす新イノベーション」『世界経済評論』Vol. 62 No. 6 (2018年11月・12月)。
- [19] 佐脇英志「アセアン ASEAN日本人起業家の研究: ミャンマーの事例」第26回アジア経営学会東部部会報告資料, 2019年4月13日。
- [20] 佐脇英志「日本人起業家の巨大インキュベーションセンター@セブ・フィリピン」『世界経済評論』IMPACT webコラム, 2019年5月13日。
- [21] 「アジアで働く タイで浮きつ沈みつ30年 人が幸せになるヒント探し続ける起業家」『朝日新聞 GLOBE』2019年4月19日。
- [22] 古沢昌之「『現地採用日本人』の研究 在中国日系進出企業におけるSIEs (self-initiated expatriates) の実相と人的資源管理」文真堂, 2020。
- [23] 鈴木岩行「アジアにおける和僑としての働き方」『和光大学経済経営学部55周年記念 教育論文編 経済経営学部のキセキ』創成社, 2021年。

アンケート調査とインタビュー調査で東南アジアの和僑会 (現 WAOJE) と会員の方に大変お世話になりました。ここに記して感謝を申し上げます。

資料 和僑の方についてのヒアリング調査 タイにおける和僑

A氏 観光客向けエステサロン経営

1. 出身地：大阪市

2. 当地へ来た当初の目的：大学在学中に海外経験積みたくて、タイの叔父のレストランでアルバイトするため

3. 当地の人に意思を伝えること：卒業後1年タイ語を勉強したため、タイ語で意思を伝えることが可能。しかし、読み書きは10年間でできなかった。

4. 現在の仕事：現地で1996年6月起業した。起業した理由は、大学卒業時、すでにタイ語を話せたこと、日本での就職は、バブル経済崩壊のあおりを受け、就職難であったこと。他人にない自分のスキルといえば「タイ語」で、それを活かす最高のフィールドと考えたため。

5. 当地で働いている理由

- A, 当地は物価が安いので住みやすい
- B, 当地は仕事がしやすいとはいえない
- C, 当地の人はフレンドリー（人当たりが良い）で、いざとなったら助けてくれる、独立時タイ人に助けてもらった
- D, 当地の人と結婚していない

6. 当地で仕事をするうえで日本より有利なこと

- (1) 当地は仕事のチャンスが日本より多い
- (2) 当地の人は日本人よりフレンドリーである
- (3) その他具体的に：多くの日本人がタイでビ

ジネスをするときに頼るのは、現地に精通している日本人であることが多い。そこで、自分のところに日本から相談やビジネスの案件が多く入って来る

7. 当地で仕事をするうえで不便なことは少しある：アジアでは良いほうであるが、インフラが整っていないこと、インドに比べてずっと良い、文化の違い

8. 当地で仕事をするうえで困ったことがあったとき、相談する相手は現地の人

9. 和僑会に加入した理由は何ですか。

- A, 相談相手が必要だったからではない
- B, 日本人の仲間が必要だったからでもない
- C, その他具体的に：タイに長くいて、自分の考え方が凝り固まってしまうぬよう、見聞を広める必要を感じたため

10. 和僑会以外で日本人同士で集まることはほとんどない

11. 現地人の友人は5人くらいいる

12. 仕事が順調でも将来日本へ帰るつもりはある 理由：セミリタイア後（50歳くらい）日本の各地を旅したい

13. この国での生活が持つ意味：お世話になったタイにたくさんの雇用を創出し、たくさんの笑顔と幸せを生み出すことで恩返ししたい

**B氏 健康と美容に関係する会社経営（補正
下着，高級ハイテクタオル，化粧品の
販売）**

1. 出身地：千葉県

2. 当地へ来た当初の目的：仕事。タイに遊びに来ていたうちにASEANの活気を感じた。バンコクは天使の都といわれ、自分と空気が合う。居心地がよく、会社を興す気になった。日本ではストレスを感じ、楽しくない。

3. 当地の人に意思を伝えること：タイ語を集中講座で7か月勉強したので可能である。外資系企業で言葉で苦労した。タイ語と英語で意思を伝えている。

4. 現在の仕事：2013年起業，タイ人女性をパートナーに営業しているが芳しくない。仕切り直しに，サイドビジネスとして標高の高いコラート県でいちご園を開始，モン族の人助けプロジェクトの意味もある。収益は上がっている。

5. 当地で働いている理由

A. 当地は住みやすい インフラが整い，法治国家である

B. 当地は仕事がしやすいとはいえないが，日本人が築いた日本製品は優れているとの感覚がある。

C. 当地の人は親日派が多くフレンドリー

D. 当地の人と結婚していない

6. 当地で仕事をするうえで日本より有利なこと

(1) 当地は仕事のチャンスが日本より多いとはいえない

(2) 当地の人は仕事をするうえで日本人よりフレンドリーであるとはいえない

(3) その他具体的に：中間層が増え，市場全体が拡大傾向にある

7. 当地で仕事をするうえで不便なことは少しある：タイ人との業務上のコミュニケーション。メールを出しても返事が来ないため，1週間先のアポイントが取れないことがある。日本人にとってストレスになる。商習慣の違い，金銭感覚の違い，社員を育てる文化がない，日本の会社は社員を大事にし，会社に忠誠心が育つ。

8. 当地で仕事をするうえで困ったことがあったとき，相談する相手は現地の社員や友人

9. 和僑会に加入した理由は何ですか。

A. 法律・税務は地元の会社に相談するので，相談相手が必要ではない。

B. 日本人の仲間が必要，日本人と情報交換

10. 和僑会以外で日本人同士で集まることは年10回くらいある

11. 現地人の友人は5人くらいいる

12. 仕事が順調でも将来日本へ帰るつもりはない。今でも3か月に1回しか帰っていない。理由：頑張ればうまくいくと考えている

13. この国での生活が持つ意味：第二の人生の場，妻子自立，妻が背中を押した。10年先見通せるのは面白くない。新しい展開を欲していた，全部変えたから楽しい。自己責任で難しいが，日本でやるより楽しいし，夢がある。

C氏 情報通信の日本商社から派遣（取締役業務）、NTTの代理店、省エネルギーを求めている中小企業に機器を販売

1. 出身地：横浜市
2. 当地へ来た当初の目的：仕事（タイでのマーケティングの情報収集）
3. 当地の人に意思を伝えること：タイ語を学んだことがないので難しい
4. 現在の仕事：日本商社から派遣（経営企画在籍）、海外でのアンケートの結果が良かったため、海外へ出たほうが良いと思ったので、自ら希望した。タイに知り合いがいた。
5. 当地で働いている理由
 - A. 当地は住みやすい
 - B. 当地は仕事がしやすい：日本に興味持ち、日本語を勉強している人が多い。日本からの出向者に従ってくれる。
 - C. 当地の人はフレンドリー
 - D. 当地の人と結婚していない
6. 当地で仕事をするうえで日本より有利なこと
 - (1) 当地は仕事のチャンスが日本より多い：競合他社はあるが、ASEANは全体的にこれから伸びるマーケット。フィリピンも電気代が高く16年1月から始めた。インドネシアは外資規制が厳しくなった。
 - (2) 当地の人は日本人よりフレンドリーである
7. 当地で仕事をするうえで不便なことは少しあ

る：商習慣の違い、仕入れ先はローカルであるが、納期が遅れるなど約束が守られないことがある、また華僑であるので方針は中国式にトップダウンで決まるが、仕事のスピードは遅い。

8. 当地で仕事をするうえで困ったことがあったとき、相談する相手は日本人
9. 和僑会に加入した理由。
 - A. 相談相手が必要、タイ進出前から世話になった。オフィスをレンタルするのも和僑会の役員の方にお世話になった。
 - B. 日本人の仲間が必要である。
10. 和僑会以外で日本人同士で集まることは常にある。
11. 現地人の友人はいない。日本人同士だと言葉が通じるので、コミュニケーションがとりやすい。
12. 仕事が順調でも将来日本へ帰るつもりはある。

理由：ASEAN 主要国への進出ができれば日本本社へ戻る。
13. この国での生活が持つ意味：日本以外の第2、第3の母国市場を創りに来ている。各国の軒先を借りて商売をさせてもらっているという意識と現地の方々をリスペクトすることが大切だと思う。日本本社で社内公募し、海外に来たい人が来ている。20代前半から55歳まで、海外手当も出る。日本とタイでは販売先の企業規模が違う。日本では中小企業が相手だが、タイでは日系大企業の製造工場である。販売の生産性は日本の6倍である。

D 氏 日本企業から派遣（コピー機等の OA 機器の販売とレンタル）

1. 出身地：横浜市

2. 当地へ来た当初の目的：仕事

3. 当地の人に意思を伝えること：英語を使っているが、従業員に意思を伝えるのは難しい（在タイ 10 か月）。タイ語は 3 か月学習したが、日本よりやることが多く、忙しい。

4. 現在の仕事：2015 年来タイ、タイが初めての海外出店であった。会社で募集があり、海外の大学（メキシコ）の経験もあり、希望した。

5. 当地で働いている理由

A. 当地は病気や渋滞のことを考えると住みやすいとはいえない

B. 当地は仕事がしやすいとはいえない。余計な仕事をしない人が多い、コミュニケーションに日本の 3 倍かかる、サインが多い、金銭の管理・確認が大変

C. 当地の人はフレンドリーである。

D. 当地の人と結婚していない

6. 当地で仕事をするうえで日本より有利なこと

(1) 当地は仕事のチャンスが日本と同じ、仕事は一緒である

(2) 当地の人は日本人よりフレンドリーだが、メキシコのほうがよりフレンドリーである

(3) その他具体的に：日本では付き合えない会社と付き合える

7. 当地で仕事をするうえで不便なことは大にある：ルールが違う、領収書発行に時間がかかる、納期の関係で日本との板挟みになる。文化が違う、試用期間内に会社に見切りをつけ退社してしまう

8. 当地で仕事をするうえで困ったことがあったとき、相談する相手は会社の日本人とタイ人

9. 和僑会に加入した理由。

A. 相談相手が必要ではない

B. 日本人の仲間が必要、会社のつながりを考えて、情報交換

10. 和僑会以外で日本人同士で集まることは年 20 回くらいある。顧客とのゴルフや飲み会のほか、神奈川県人会、相鉄線会など

11. 現地人の友人は、接点がないのでいない

12. 仕事が順調でも将来日本へ帰るつもりはある

理由：親がいるため

13. この国での生活が持つ意味：MD として日本では付き合えない偉い人と付き合える。海外で初めて立ち上げた会社なので、まだ文化や言葉など勉強することがある。海外主張費、責任者手当、住居費出る。

E氏（女性） 会計事務所経営

1. 出身地：高知県

2. 当地へ来た当初の目的：仕事，シンガポールやアメリカでも仕事で駐在経験あり，またイギリスとアイルランドにも留学経験あり。5か国の中でタイが自分に一番合っていると感じる。

3. 当地の人に意思を伝えること：6か月間週1回プライベートレッスンを受けて，タイ語と英語で意思を伝えることは可能である。

4. 現在の仕事：2011年起業。仕事し過ぎで体を悪くしてやめていたところに，銀行がタイで日本人の会計専門家を探していた。

5. 当地で働いている理由

A, 当地は住みやすい：衣食住・治安が良い，アメリカは緊張感がある。日本食他日本のものが手に入る。

B, 当地は仕事がしやすい：タイ人は先生や年上に従う，日本人と似ている。歩いて10分で通勤できる，ハードワーカーには便利。

C, 当地の人はフレンドリー：中国人と比べ笑顔がある。タイ人は好き嫌いがはっきりしてわかりやすい。素直＝幼稚であり，コツをつかめば扱いやすい。

D, 当地の人と結婚していない

6. 当地で仕事をするうえで日本より有利なこと

(1) 当地は仕事のチャンスが日本より多い：日本人社会から仕事の話が来る。タイ人の公認会計

士は締め切りを守らないので，日系企業から仕事に来る。

(2) 当地の人は日本人よりフレンドリーである

7. 当地で仕事をするうえで不便なことは大いにある：言葉の問題と法令の違い

8. 当地で仕事をするうえで困ったことがあったとき，相談する相手は日本人とタイ人

9. 和僑会に加入した理由は何ですか。

A, 相談相手が必要ではない

B, 日本人の仲間が必要

10. 和僑会以外で日本人同士で集まることは年10回くらいある

11. 現地人の友人は5人くらいいる，仕事以外を含めて英語で話す。日本人より英語ができる

12. 仕事が順調なら将来日本へ帰るつもりはない。

理由：タイで会社を作ったので。

13. この国での生活が持つ意味：生活の場，仕事の間，自己実現の場。肩の力を抜いて，生きていける場所。日本より多く仕事をしているが，ストレスが少ない。日本にいたときはサラリーマンとしてのストレスがあった。今は会社を経営しているので，自分で決められる。従業員のジョブホッピングが多いことや毎月税務申告があるなど会社のことがストレスにはなる。前述のように住環境も職住接近である。

F氏 市場調査・企業進出支援会社等経営

1. 出身地：大分県
2. 当地へ来た当初の目的：日本の高級車の販売の仕事
3. 当地の人に意思を伝えること：タイ語を1年半勉強したので、意思を伝えることは可能。タイ語、日本語、英語のミックス
4. 現在の仕事：2006年起業。タイ国内の中間層増加、AECのスタート、市場拡大・成長が期待できたから。タイは親日で、自分自身海外での橋渡し、海外市場の経験や学習に興味があったため。日本の高級車の販売の仕事で大手企業とネットワークもできていた。
5. 当地で働いている理由
 - A. 当地は住みやすい
 - B. 当地は仕事がしやすい
 - C. 当地の人はフレンドリー
 - D. 当地の人と結婚していない
6. 当地で仕事をするうえで日本より有利なこと
 - (1) 当地は仕事のチャンスが日本より多い：日系企業が8500社進出し、在留邦人は6万5000人に上り、さらに増加している。
 - (2) 当地の人は日本人よりフレンドリーである
 - (3) その他具体的に：戦前から日本への信頼がある。皇室とタイ王室との良好な関係にみられるように。

7. 当地で仕事をするうえで不便なことは全くない：自社のスタッフはタイ人で、タイ人に助けられている。英語ができ、少し日本語ができるタイ人、同社は教育に力を入れ、中堅大学出身の方が伸びると感じている。
8. 当地で仕事をするうえで困ったことがあったとき、相談する相手は日本人とタイ人の両方。
9. 和僑会に加入した理由は何ですか。
 - A. 相談相手が必要だったからではない
 - B. 日本人の仲間が必要だったからではない
 - C. その他具体的に：早朝勉強会していたところ、和僑会を立ち上げることになり、5年前に発足させた。
10. 和僑会以外で日本人同士で集まることは年50回くらいある。会社以外でJCCの勉強会、県人会、稲門会、早慶でのクリスマスパーティなど。
11. 現地人の友人は100人くらいいる。
12. 仕事が順調でも将来日本へ帰るつもりはある。

理由：ある程度仕事が委譲できて、時間を作り、月の半分くらい日本で後進の教育をしたい。
13. この国での生活が持つ意味：日本という価値・ブランドはタイを含めて素晴らしいものがあるにもかかわらず、伝わっていないことが多い。そのことをより世界にも知ってもらい、利用してもらい、満足してもらい。そして日本を好きになってもらうことが、先人の方の歩んできたものをつなぐことだと考えている。

ミャンマーの和僑

G氏(女性) 日本企業から派遣(税理士業務を中心に経理, 労務, 法務, 現地パートナー探し等の業務を行う会社), ヤンゴン和僑会事務局を担当

- 1, 出身地: 愛媛県
- 2, 当地へ来た当初の目的: 日本企業の支社立ち上げの仕事のため
- 3, 当地の人に意思を伝えること: ビルマ語を1年学習し会話は可能。スタッフとは英語で話し, スタッフ同士はビルマ語で話をしている。
- 4, 現在の仕事: 2014年4月に日本企業の支社立ち上げのため派遣。立ち上げ後半年で帰国予定だった。日本の税理士事務所で15年の勤務経験あり。
- 5, 当地で働いている理由
 - A, 当地は物価が安く住みやすい
 - B, 当地は仕事がしやすい: 識字率高く(日本人より)優秀, 打てば響く。頭がよく気立ての良い人が採用できる。この2年で変わった, 自分で考えるようになった。
 - C, 当地の人はフレンドリー: 気性が日本人に近い, 人情味あり親切で助けてくれる。
 - D, 当地の人と結婚していない
- 6, 当地で仕事をするうえで日本より有利なこと
 - (1) 当地は仕事のチャンスが多い
 - (2) 当地の人は日本人よりフレンドリーである
 - (3) その他具体的に: ミャンマーでは公認会計士はほとんどが女性であるが, 彼女らは素直なのでマナー研修だけで良くなる。
- 7, 当地で仕事をするうえで不便なことは大いにある。法律の建付けと運用が全く違う。現場の担当者の判断任せ。法律がころころ変わる。公務員教育ができていない。
- 8, 当地で仕事をするうえで困ったことがあったとき, 日本人に相談する。50~60人の女子会がある。
- 9, 和僑会に加入した理由は何ですか。
 - A, 相談相手が必要だったからではない
 - B, 日本人の仲間が必要だったから
- 10, 和僑会以外で日本人同士で集まることは毎日ある。和僑会以外の事務局も担当しているので, イベントが多く, 様々なオファーも来て, 顔が広がった。
- 11, 現地人の友人は仕事以外では, 日本語を話せる2人。
- 12, 仕事が順調でも将来日本へ帰るつもりはある。

理由: 税理士なので, 日本の税法をキャッチアップしたい。ミャンマーの税法は緩やかなので, 帰国しても何とかなる。帰国するか否かは自分で決められる。
- 13, この国での生活が持つ意味: ASEAN諸国の中でも1, 2の親日国, ただし日本大好きはいない, 日本を知っているレベル。良いイメージは遺族会の功績だと思っている。仏教国で上座部仏教の生活を直に感じながら, アセアンビジネスを体現していけることは大変有意義である。

H氏 日本企業へ賃貸する不動産業経営

1. 出身地：愛媛県

2. 当地へ来た当初の目的：仕事。ミャンマー人の元小学校校長から小中学校の修理を依頼され、2000年からボランティアで年2～3回往き来していた。2011年の選挙後進出決める。

3. 当地の人に意思を伝えること：ビルマ語を週1回2時間マンツーマンで3か月勉強したが、発音が難しい。最近では引っ越し等で勉強していない。会社のパートナーは滞日13年で日本語がバラバラである。ミャンマー人の取引先とはビルマ語・日本語・英語のミックスで意思を伝えている。

4. 現在の仕事：2012年11月起業。

5. 当地で働いている理由

A, 当地は日本と比べて住みやすくない。日本での報道と違う。

B, 当地での仕事は日本人相手なのでしやすい

C, 当地の人は表面的にはフレンドリー、働かない・考えない・金に執着する人が多い。

D, 当地の人と結婚していない

6. 当地で仕事をするうえで日本より有利なこと

(1) 当地は仕事のチャンスは、日本と比べて何もないので多い。不動産以外も考えている。

(2) 当地の人は日本人よりフレンドリーである

とはいえない。

7. 当地で仕事をするうえで不便なことは大いにある。インフラ（電気、電話、インターネット等）未整備。人材不足、会社で働く上での心構え、マナー教育されていない人がほとんど。育てたら移動してしまう。

8. 当地で仕事をするうえで困ったことがあったとき、相談相手は日本人、愚痴を言い合っている。

9. 和僑会に加入した理由は何ですか。

A, 相談相手が必要だったからではない。

B, 日本人の仲間が必要で、情報が少ないので、情報を聞くことができる。

10. 和僑会以外で日本人同士で集まることは年30回くらいある。建設・不動産業の集まりや同年代の集まりなど。

11. 現地人の友人は10人くらいいる。

12. 仕事が順調でも将来日本へ帰るつもりはある。

理由：老後は日本で過ごしたい。

13. この国での生活が持つ意味：自らのビジネス展開、チャンスが多いのでどれだけ実現できるか。人材ない、何も知らないミャンマーを変える手伝いをしたい。学校づくりに役立ちたい。

I氏 日本（80%出資）とミャンマーの合併 の建築・設計会社勤務

1, 出身地：兵庫県

2, 当地へ来た当初の目的：仕事。KTVの設計依頼され、ミャンマーの工事業者を探したとき、現在の合併相手が日本人と接触があり、親しくなりミャンマーで事業することになった。

3, 当地の人に意思を伝えること：合併相手は日本語がペラペラである。ビルマ語は勉強したことがないので、仕事は通訳を使って英語で意思を伝えている。

4, 現在の仕事：2015年11月に自ら（半分）希望して派遣。建築物を見るために1か月バックバックでヨーロッパを回ったことがある。

5, 当地で働いている理由

A, 当地は住みやすい

B, 当地は仕事がしやすいが、許可には賄賂がつきものである。優しいが緩さになり、約束が守れなかったり、ナーナーになったりする。

C, 当地の人はフレンドリー（気楽）で、接しやすい。ローカルのアパートに住んでいるが、車を掃除してくれる。

D, 当地の人と結婚していない。

6, 当地で仕事をするうえで日本より有利なこと

(1) 当地は仕事のチャンスが多い。日本の大手の人と会う機会が増えた。仕事は日本人とのつな

がりや不動産屋が紹介してくれる。ミャンマー人にとって、日本はブランドであると感じている。

(2) 当地の人は日本人より表面的にはフレンドリーである

7, 当地で仕事をするうえで不便なことは少しある。性質の違い、具体的にはスケルトン渡しであるが、図面通りに作れない。大まかである。

8, 当地で仕事をするうえで困ったことがあったときは、日本人と現地のパートナーに相談する。パートナーは滞日3年で、富裕層出身で信用できる。

9, 和橋会に加入した理由は何ですか。

A, 相談相手が必要だった。

B, 日本人の仲間（横のつながり）が必要

10, 和橋会以外で日本人同士で集まることは月3回くらいある。

11, 現地人の友人は10人くらいいる。休日は飲みに行くことくらいしかない。

12, 仕事が順調でも将来日本へ帰るつもりはない。

理由：日本では仕事をこなすだけだが、ミャンマーでは何かが起こりそうで、10年いてもよいと思っている。しかし、会社を背負うストレスと食事が合わないので10kg痩せた。

13, この国での生活が持つ意味：まだ来てから3か月なのでこれから（考える）

J氏 情報誌（人材紹介、不動産仲介、コンサルティングのフリーペーパー）会社経営

1. 出身地：横浜市

2. 当地へ来た当初の目的：仕事、2013年1月観光旅行でミャンマーに来て魅了された。日本人商工会に300社加盟しているにもかかわらず、マーケティング・リサーチ、情報が不足しているのを痛感し、情報誌を発行することにした。

3. 当地の人に意思を伝えること：ビルマ語を勉強したことはないが、英語で意思を伝えることは可能。従業員15人中5人は日本人で、半分は日本語のできるミャンマー人を雇っている。

4. 現在の仕事：2013年5月起業し、6月には第1号発行、1年で単月黒字となった。これほど早く発行でき、黒字化も早かったのは中国での経験があったからである。2011年～12年に上海東華大学に留学し、情報・ファッション誌を発行し、学生起業家として上海和僑会に加入した。2012年9月の尖閣諸島国有化問題で流れが変わり、発行を停止した。

5. 当地で働いている理由

A. 当地は住みやすい：①日本の50年前とオーバーラップする。ミャンマー人の心情は日本人に近い。ミャンキチ（ミャンマーが非常に好きな人）いる。②手つかずのパガンやのんびり湖上生活している人がいるインレー湖などは生きている世界遺産である。人生観が変わった。

B. 当地は仕事がしやすい：③変化が著しい、4～5年後は様変わりしそうでワクワクする。インフラは全く整っていない。

C. 当地の人はフレンドリー：④ミャンマー人

とのコミュニケーションが気持ちよい。

D. 当地の人と結婚していない。

6. 当地で仕事をするうえで日本より有利なこと
(1) 当地は仕事のチャンスあり：上記の①～④以外に、著名人と対談できるなど、情報誌のため人脈が作れた。

(2) 当地の人は日本人よりフレンドリーである

7. 当地で仕事をするうえで不便なこと：少しある、法制や税制。しょっちゅう変わり、中には印紙税法のように100年前の法律が適用されることもある。

8. 当地で仕事をするうえで困ったことがあったとき：相談するのはミャンマー人

9. 和僑会に加入した理由は何ですか。

A. 相談相手が必要だった。

B. 日本人の仲間の相互扶助が必要だと思い、2013年7月のミャンマー和僑会創立に参加した。前述の上海和僑会の理念に賛同したことによる。

10. 和僑会以外で日本人同士で集まることは年20回くらいある。メールは毎日200通ほど来る。

11. 現地人の友人は10人くらいいる。日本の知人より親しい。

12. 仕事が順調でも将来日本へ帰るつもりはある。

理由：他の国に行くかもしれないので。

13. この国での生活が持つ意味：変化の著しい国においてビジネスチャンスは無限にある。日本の1000億円のODAをミャンマー人は喜んでいる。中国は恐れるに足りない。

K氏 トラック輸入販売業経営

1. 出身地：奈良県
2. 当地へ来た当初の目的：仕事。日本とミャンマーの合弁のトラック輸入販売会社の雇われ社長として現地採用された。
3. 当地の人に意思を伝えること：ビルマ語で可能、1年学習したが、それよりも妻（ミャンマー人）との会話で上達した。
4. 現在の仕事：2012年会社設立。前述のように雇われ社長として現地採用された。それ以前はタイで中古フォークリフトを扱っていた。タイではワクワク感を感じないが、ミャンマーでは感じている。
5. 当地で働いている理由
 - A, 当地が住みやすいからではない。停電や断水があるが、タイにいた時よりも給料が上がり、生活がワンランクアップしたから。
 - B, 当地は仕事がしやすくない。ルール変更が行き渡らない。インターネットにも（情報が）出ない。
 - C, 当地のフレンドリーな人は騙しに来ている。仕事をきちんとする人は無愛想である。
 - D, 当地の人と2年前に結婚
6. 当地で仕事をするうえで日本より有利なこと
 - (1) 当地は仕事のチャンスは日本はもとより、タイよりも多い。
 - (2) 当地の人は日本人よりフレンドリーであるとはいえない。
7. 当地で仕事をするうえで不便なことは大にある。情報がほとんど出てこない。トラックの輸入に関するルールがころころ変更されて困る。税関と貿易省に話しても責任を押し付けあい、逃げただけである。
8. 当地で仕事をするうえで困ったことがあったときは、友人のミャンマー人の有力者に相談する。
9. 和僑会に加入した理由は何ですか。
 - A, 相談相手が必要：ミャンマーは日本人が少ないので。
 - B, 日本人の仲間が必要だった。
10. 和僑会以外で日本人同士で集まることは週2～3回くらいある。大阪人会など。
11. 現地人の友人は10人くらいいる。合弁会社のミャンマー人とビルマ語・日・英語のミックスで話す。
12. 仕事が順調でも将来日本へ帰るつもりはない。

理由：日本には保険も年金もなく、未練もないので帰る理由はない。
13. この国での生活が持つ意味：生活も仕事も生きるため。いつまでトラックが輸入できるかわからず必死で、危機感がある。

(2021年5月7日 受稿)
(2021年6月20日 受理)